

クメールの前近代都市についての覚え書き

上野 邦一 (奈良女子大学)

はじめに

クメールとはカンボジアと同義語で、現在のカンボジアと周辺に所在する前近代の文化・歴史、国家などを指す場合にクメールという語を使う。クメール帝国とかクメール文化とかのように。クメールの前近代都市は、現在のカンボジア領内だけでなく、ラオス、タイなどにも存在する。カンボジアの前近代都市とすると、現在のカンボジア領内をイメージしてしまうのでクメールの前近代都市とした。本稿は、クメールの前近代の都市を取りあげ、可能なかぎり属性を見だし、今後の研究課題の抽出を試みるものである。

取り上げる都市を前近代都市としたのは、紀元6世紀前半ころの扶南の都市と考えられているアンコール・ボレイから、13世紀ころのアンコール・トムまでを対象とするからである。日本の年代観では古代から中世に渡るので、前近代とした。

都市とは何かを議論し考察することが本稿の目的ではないが、結果的に都市とは何かという課題に問題提起することになる。

近年東南アジアでの、前近代都市の議論が展開している。例えば東南アジア考古学会は学会研究報告第3、4、5号で「東南アジアの都市と都城」の特集を組んだ⁽¹⁾。新田栄治さんは『季刊文化遺産』で「東南アジアの古都」を取り上げている⁽²⁾。布野修司さん等は『アジア都市建築史』でアジアの前近代都市論を展開している⁽³⁾。さらに、早稲田大学のチームによるサンボレイ・プレイ・クック⁽⁴⁾、コーケル⁽⁵⁾などの研究成果が続いている⁽⁶⁾。2010年5月の東方学会の第55回国際東方学者会議、2011年12月の歴史民俗博物館の国際シンポジウム⁽⁷⁾などでも、本稿に関わる都市についての議論が展開された。

クメールの前近代都市の研究は、進み始めているが、決して大きく進展している訳ではない。なによりも考察対象となる都市遺跡が、詳しくは分かっていないことによる。漢籍史料、碑文史料、遺跡の三者間相互の一致と矛盾から生じる問題は、解決されていない、と私は考えている。漢籍史料、碑文史料は限りがあり、これま

でも研究の蓄積がある。しかし、考古学的に信頼できる発掘調査の蓄積は、まだ乏しい。こうした状況が、クメールの前近代都市研究の進展を難しくしている。ただ、発掘調査はおおきく展開していくだろうから、その成果は今後期待できる。

現時点でクメールの前近代都市で入手出来る資料を収集し、属性を考察した。発掘調査などによって新しい知見が発見され、より深い考察が可能になることを期待したい。

1. クメールの前近代諸都市

プレ・アンコール時期の都市について、下田一太さんは金山好男さんの碑文を考察した論文を参照しながら、サンスクリット語で都市を意味する *pura* が語尾につく



図1 東南アジアの前近代都市位置図(千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』に掲載の図に加筆)

34の都市について指摘している⁽⁸⁾。この34の都市すべてを現在のどこの遺跡に比定するかは、確定できていない。34の都市のいくつかは、現在の遺跡に比定されている。サンボレイ・プレイ・クックは真臘の首都イシャーナプラであることが確定しているほか、ラオスのチャンパサックにある都市遺跡はシュレシュタプラと考えられている。

時代がすこし前後するが、クメールの前近代都市を列挙すれば、ベトナムのオケオ、カンボジアのアンコール・ボレイ、サンボレイ・プレイ・クック、バンテアイ・プレイ・ノコル、ロルオス、アンコール第1期から第4期、コーケル(チョックガルギャー)、ラオスのチャンパサックの都市遺跡(シュレシュタプラ)などがある(図1)。個々の遺跡の現況や考察史の詳細については注に掲げた文献や参考文献を参照して欲しい。

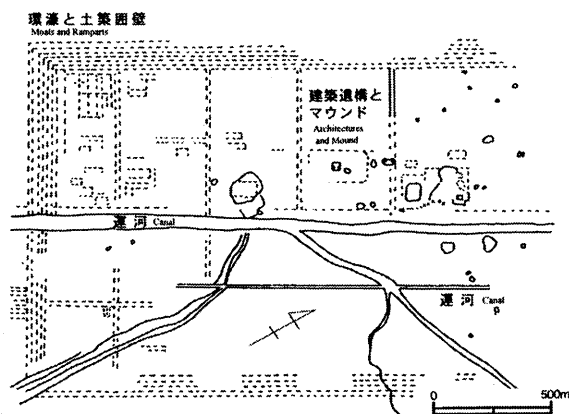


図2 オケオ 出典：中村慎一編『東アジアの囲壁・環濠集落』

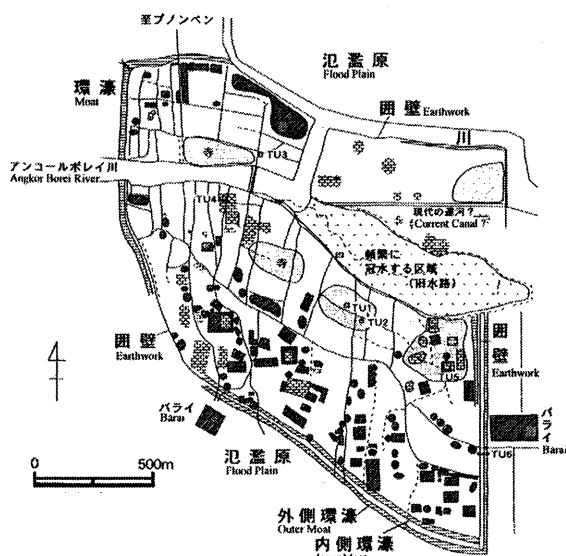


図3 アンコール・ボレイ 出典：中村慎一編『東アジアの囲壁・環濠集落』

問題点や課題だけを指摘しておく。サンボレイ・プレイ・クックについては下田太一さんの研究⁽⁹⁾、コーケルについては佐藤桂さん⁽¹⁰⁾の研究を参考にした。

ベトナムのメコン河下流域に、2世紀から6・7世紀ころまで存続したオケオがある(図2)。オケオについて、これまで方形の環濠が都市を囲むというマルレの説が受け継がれてきたが、環濠の有無は考古学上では確認されていない。従ってオケオが方形の都市かどうかは確定しているとは言えない。

アンコール・ボレイ(図3)は、1世紀末から7世紀初頭までメコンデルタにあった古代国家扶南の都と考えられている。オケオと運河で結ばれていた。

サンボレイ・プレイ・クック(図4)は内陸部にあり、漢籍史料に登場するカンボジアの古代国家である真臘の首都イシャーナプラである、と考えられている。

バンテアイ・プレイ・ノコル(図5)はプノンベンの北東約95キロメートルあたりにある遺跡でインドラプラに比定されている。

ロルオス(図6)、アンコールに先行する首都で9世紀末の都市と考えられている。

クメールが栄えた9世紀15世紀の間首都であったのがアンコール(図7)である。アンコールは都市として4時期、あるいは3時期あるとする所見がある。千原大五郎さんは4時期案を著書で引用しているが⁽¹¹⁾、4時期あるかどうかについては、私は疑問があり、少なくとも2時期はあると考えている。都市を囲む濠は新旧2時期認められ、この2時期の都市の中心をプノム・バケン、バイオンを充てることが出来る。一方、4時期あるとする案では、プノム・バケン、バイオン以外に都市の中心に、ピメアナカス、バプーオンを充てると、この2時期に相応する濠は現状では認められない。そこで、プノム・バケン、バイオンを中心とする2時期は確実にあったと考え、他の2時期の都市の存在には疑問を待っている。

アンコールに拠点があった間の1時期、10世紀前半にコーケル(図8)に遷都されている。2代の王が在位していた。

現在ラオスの南部にワット・プー寺院があるが、その東、メコン河沿いに都市遺跡があり漢籍史料に登場するシュレシュタプラ(図9)だと考えられている。7世紀ころから13世紀ころまで存続した。

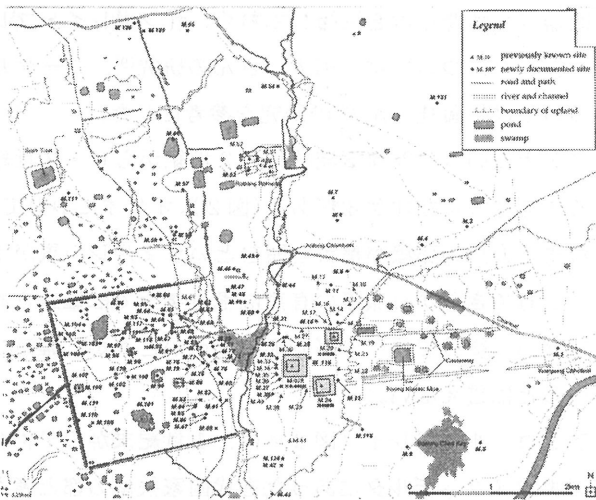


図4 サンボレイ・プレイ・クック 出典：下田太一『クメール古代都市イーシャナプラの研究』

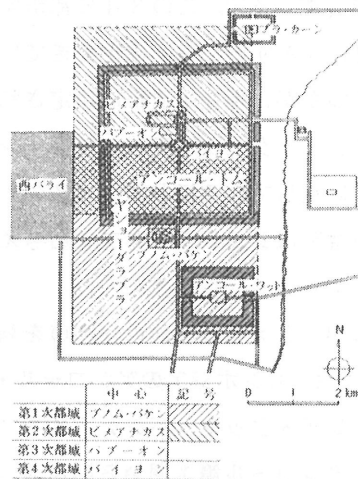


図7 アンコール四時期案 出典：千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』

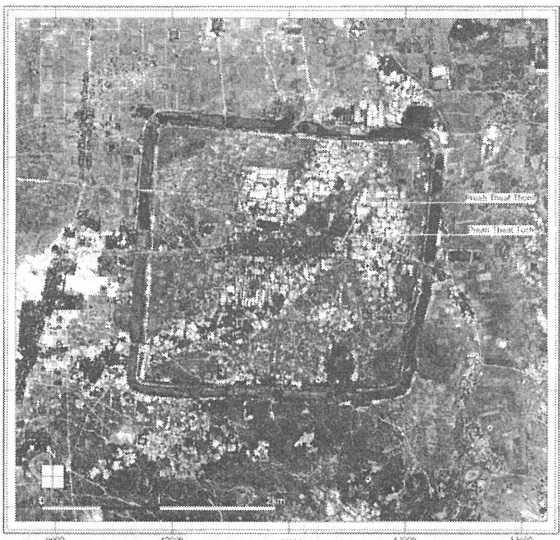


図5 バンテアイ・プレイ・ノコル 出典：下田太一『クメール古代都市イーシャナプラの研究』

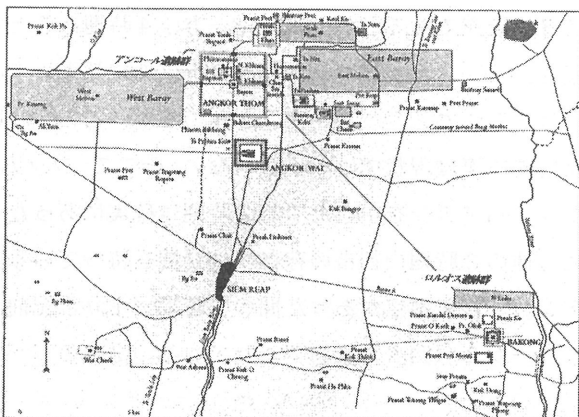


図6 アンコール遺跡群、ロルオス遺跡群(Claude Jacques, Philippe Lafond『The Khmer Empire』に掲載の図に加筆)

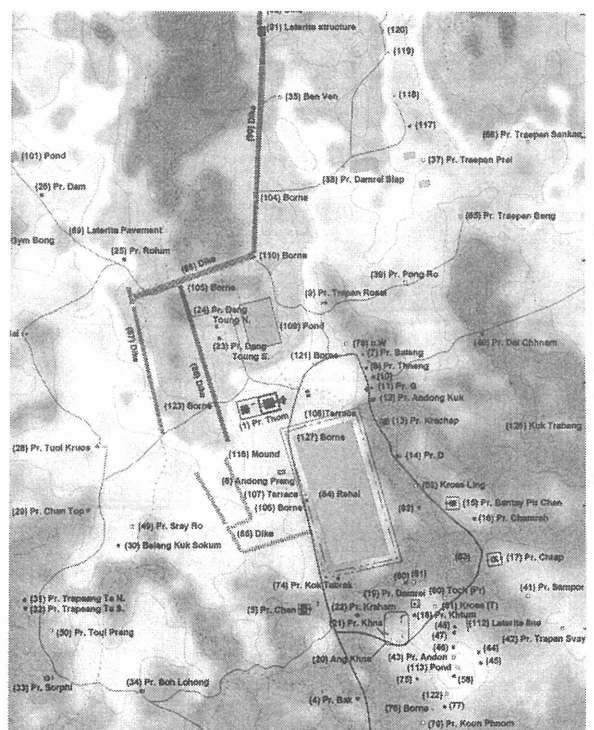


図8 コーケル 出典：佐藤 桂『クメール古代都市「チヨック・ガルギヤー」研究序説』

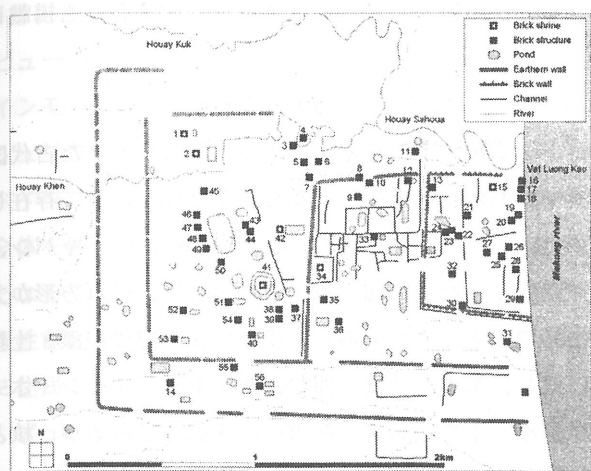


図9 シュレシュタプラ 出典：下田太一『クメール古代都市イーシャナプラの研究』

2. いくつかの所見

1) 環濠・土塁

クメールの前近代都市で濠や土塁が囲う都市がある、濠や土塁が囲う形状から都市全体の形状が推察される。

確実に都市を四周する事例は少なく、パンテアイ・プレイ・ノコルと第4期のアンコール、すなわち現在のアンコール・トムとがある(図5, 7)。第1期のアンコール都市はプノム・バケンを中心に置き、濠は南と西でしか確認出来ない。第2期以降のアンコール都市の造営で破壊された可能性を否定できないが、現状を観察する限り、東・北で1期の濠を確認出来ない。第4期アンコール・トムは濠が四周し、方形である。

アンコール・ボレイ(図3)では、濠は南と西、北に一部、東には濠がなく壁によって囲われている。北には川があり、濠として取り込んでいたかもしれない。サンボレイ・プレイ・クック(イシャナプラ)(図4)では、南北と西に濠があり方形を呈するが、東には濠がない。ロルオス(図6)では、都市全体を囲う濠や土塁は確認できず、都市全体の形状は不明である。

コーケル(チョック・ガルギヤー)(図8)では、南北と西に土塁があるが、東には無く、これらがある領域を囲う様相を呈していない。コーケルが都市とすれば全体は不整形である。ラオスのシュレシュタプラ(図9)では、南北と西で濠・土塁があり、東はメコン河である。当初は濠が四周し、東の濠はメコン河で浸蝕されたと考えられている。その可能性もあるが、当初から、メコン

河に沿って都市が造営され、東濠にメコン河をあてていた、とすることも考えられることである。

濠や土塁によって、クメールの前近代都市の形状には不整形・ほぼ方形の2タイプがあることなどが、すでに先学によって指摘されている。

不整形：アンコール・ボレイ コーケル

方形あるいは方形と見なす：サンボレイ・プレイ・クック、アンコール・トム、シュレシュタプラ、プラサート・プレイ・ノコル

不明：ロルオス、オケオ

濠や土塁が四辺にある事例以外で濠・土塁を持つ都市を見ると、東に濠や土塁が無い不明瞭であることが共通する属性である。

2) 王宮・宮殿

私は、宮殿・王宮の位置が不明確、支配者の拠点が不明であることが、共通する属性であると思われ、この点の考察を進める。

オケオ、アンコール・ボレイは王宮跡が不明で、中心施設も不明である。アンコール・プレイ・ノコルでは王宮跡は不明で、中心に寺院がある。シュレシュタプラでは、王宮跡は不明だが方形区画の東よりにレンガ壁で囲うと見られる区画がある。第一次のアンコールはプノム・バケンを中心とすると考えられていて、王宮は不明である。サンボレイ・プレイ・クック、コーケルでは多くの寺院が存在するものの、宮殿域は確認できない。ロルオスではロレイ、バコン、プリア・コーなど、いくつかの寺院やバライ跡が認められるが、王宮跡は認められず、不明である。

アンコール地域の13世紀末ころの様相を記述した書誌『真臘風土記』⁽¹²⁾によれば、王宮はパイヨン寺院の北一里(約600メートル)ほどに位置すると述べる。この記述が正しいとすればアンコール・トムの北半部に王宮があることになる。クメールの前近代都市で王宮が確認できるのは、アンコール・トムだけになる。ただ、私は、アンコール・トムの王宮と言われる区画も厳密に言えば、考古学的に証明されていないので王宮があったと確定していない、と考えている。もちろん、アンコール・トムの北一帯が王宮であった可能性を否定するものではない。いずれにしても、アンコール・トムを除くと、クメールのどの前近代都市も宮殿・王宮の位置は不明である。

3) 被支配者の居住

現在クメールを代表する前近代都市であるアンコールでは、中心に寺院を置く。そして、王宮あるいは支配者の拠点が不明なばかりか、居住者の区画も不明である。ようするに、分布に濃淡があるが寺院群が存在していたことだけが明かな都市なのである。

クメールの前近代都市では、権力者の拠点となる建物群が不明確であるばかりでなく、被支配者の居住区が分からないし、彼等が集住していたかも不明である。

「都市」をどう把握するかという議論に抵触するが、クメールの前近代都市の考察を進めると、宮殿地域・被支配者の居住区が不明で、宗教施設が集中し、都市と言うよりも寺院群が集中する地区とした方が良いかもしれない、との考えが浮かんでくる。ただ、これも都市の一形態である、とする議論が避けられない。

被支配者の居住の痕跡が残っていないだけで、居住していたと考えるべきだとすることも不可能ではない。しかし、たとえば先史時代の洞窟遺跡のように、人間が生活していた場合は何らかの痕跡が残るものである。火の跡、少ないかもしれないが、生活器としての土器・ナイフなどの発見がある。バンテアイ・クデイのD11と呼ぶ建物の北一帯で継続的に行ってきた発掘調査では、何らかの宗教活動は行っているが、人々が生活していた痕跡は見いだせないでいる⁽¹³⁾。バンテアイ・クデイの周壁の中で、宗教者を除くと居住者は居なかったと考える方が自然である。

人間が生活をしていれば、その痕跡をすべて消しさつて土層が堆積していくことは考えられない。このように考えてくると、クメールの前近代都市で、居住者の痕跡が発見出来ないのであれば、居住者が居なかった、すくなくとも希薄だったと考えざるを得なくなる。

3. 周辺諸国の前近代都市

クメールの前近代都市を考える上で、交流があったと考えられる周辺諸国の前近代都市を考察し、クメールの前近代都市の属性を浮かび上げることができれば、と思う。ただ、周辺諸国の前近代都市の様相は、発掘調査・研究の蓄積が乏しく、考察できる項目・対象は限られ、都市を囲う施設があるかどうか、王宮があるかどうかに絞って考察する。とりあげる前近代都市のそれぞれの図

は掲載すると図が多くなるので省き、位置のみを掲載した(図1)。

1) ベトナム：チャンパの古代都市

ベトナムの中部から南部にチャム族が樹立した古代国家チャンパが、7世紀ころから17世紀にかけて存在していた。チャンパの都市として、チャキュウ、チャバン、タイン・ホーなどが知られ、その多くは、ほぼ方形か方形を基礎とする形状である。チャキュウでは環濠・土塁が四周し、都市内に壁で囲む区画がある。タイン・ホーでは環濠・土塁があり、都市内は未調査であるが、核となる施設の痕跡は希薄である。チャバンでは、濠が西南の一部に残るが四周するかどうか不明で、土塁は四周する。都市中央に銅塔と呼ばれる寺院がある。

2) タイ ドゥヴァラパーティの古代都市ほか

タイ中部から西南にかけて、6世紀から11世紀にドゥヴァラパーティという古代国家があった。ドゥヴァラパーティの古代都市には、シーテップ、ナコン・パトム、クープアなど知られ、方形に近い不整形の形状で濠が囲むことは共通する。ナコン・パトム以外は、都市の中核となる施設、宮殿域は不明確である。

タイの都市は、都市よりも規模が小さくなる集落であっても、造営のときに中心に柱を立てる。物理的に厳密な中心にではなく、中心とみなす位置に、である。アンコール・ワットの西20キロメートルほどにあるロヴェエアクの集落は、タイの古代環濠集落に共通する集落と考えられる。とすると、クメールの前近代都市の理念の中に、タイで見られる都市の核に当たる柱の考え方があると考えられる。この考えが正しければ、クメールの前近代都市で中心に位置する寺院に受け継がれているとも考えることが出来よう。

チェンマイは方形の都市に、拡大部分が付加して不整形の形状を呈する。方形の当初の都市内に、複数の寺院跡が確認されるが、宮殿域は見いだせない。

プラサート・ムアン・シンを核とする都市遺跡がある。方形で東西と北に濠・土塁があり、南は川である。宮殿域は確認出来ていない。

現スコータイは方形の形状をしていて、囲壁の中に寺院群の遺構があるが、王宮は確認されていない。

3) ミャンマー

現在のミャンマーの中部に、ピューと呼ばれた国家が

2世紀ころから9世紀ころまで存在したことが知られる。ピューの古代都市としてシュリクシュトラ、ハリン、マインモー、ペイタノなどの都市遺跡がある⁽¹⁴⁾。このうちシュリクシュトラ、マインモーは円形に近く、ハリン、ペイタノは長方形に近い不整形である。いずれも、都市全体を囲う壁があり、内部の中心に近い位置に都市の核となる王宮が想定されている。『蠻書』巻十に「驃國・・・百姓盡在城内」と記述があって、ピューの都市では城内に住民が居たと考えられる。

ピューの後の前近代都市にはパガン、マンダレーがある。パガンは、壁が囲む方形の都市で、王宮跡と想定されている遺構群が発見されている。マンダレーは方形の都市で核に王宮がある。

ピューの諸都市は南詔に、パガンは元によって滅亡させられている。ミャンマーの前近代の諸都市は中国との交流があったことを想定させるので、中国南部の前近代都市との比較検討をふまえて考察すべきかもしれない。

4) インドネシア

ジャワ島中部にあるクラトン・ラト・ボコの王宮跡が知られるが、この王宮に伴う都市域は明らかにされていない。ソロ(スラカルタ)やジョグジャカルタでは王宮が明確であるが、都市域を囲う施設は不明確である。

坂井隆さんは、バンテン・ギラン遺跡の発掘調査に関連して、まずバンテン・ギランが9世紀以前から17世紀まで存続したこと、プグン・ラハルジョ、バンテン・サリなどの都市遺跡があり、スマトラ島北端部に13世紀後半ころのサムドゥラ・パサイ都市遺跡があることを指摘している⁽¹⁵⁾。このうちプグン・ラハルジョは川と不整形の壕・土塁で囲まれた都市である。

4. インド、スリランカの前近代都市

東南アジアの建築に大きな影響を与えたと考えられているインド、スリランカについて、都市形成でも影響があるかどうか、管見する範囲で取り上げる。とりあげる前近代都市のそれぞれの図は掲載図が増えるので省き、位置のみを掲載した(図10)。

1) インド

応地利明さんは「アルタシャーストラ」が古代インドの都城思想を記述しているとし、その記述を整理して、インドの都城の形態・都市内構成を提示している⁽¹⁶⁾。



図10 インド、スリランカの前近代都市位置図(千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』に掲載の図に加筆)

しかし、例えば北インドのマヘート遺跡⁽¹⁷⁾では中心・核となる構造物は不鮮明で応地さんが提示したモデルに合致しない。マヘート遺跡はシュラーヴァスティ(舎衛城)で、北コーサラ国の都城と考えられている遺跡である。現在のサヘート・マヘート遺跡をみると、都市全体の形状は三日月型不整形の形状で土塁が残る。都市の核になる王宮・寺院は確定していない。

南インドにはカンチープラム、マハーバリプラム、マドゥライ、タンジャヴールなどの前近代都市がある。

カンチープラムは7世紀から9世紀ころのパッラバ王朝の首都でパッラバ王朝滅亡後もチョーラ朝、ヴィジャヤナガラ朝、ナーヤカ朝の時代でも都市として栄えた。全体は不整形で都市を囲う施設はなく、王宮は不鮮明で寺院が明確である。ほぼ同時代のマハーバリプラムは港町で、寺院があるが都市を囲う施設はない。

マドゥライは、7世紀から13世紀までパーンディヤ王朝の首都であったが、その後興亡があるが、18世紀まで諸王国の首都で南インドの古都と呼ばれる。旧市を囲う濠・壁は破壊され道路になっているが、痕跡として

分かる。旧都市は方形に近い不整形で、宮殿が残る。

タンジャヴールは、9世紀から13世紀にかけてチョーラ王朝の都市で一時期は首都であった。環濠が認められ、ほぼ円形で、宮殿も明確である。

2) スリランカ

スリランカは、仏教を通じて東南アジアとつながりが深いとされる。スリランカの前近代都市には、アヌラーダプラ、ポロンナルワ、キャンディなどがある。

前4世紀ころから8世紀末ころに存続したアヌラーダプラは都市を囲う施設はなく全体は不整形で、都市内に壁で囲う不整形の区画がある。次に7世紀から13世紀にかけて存続したポロンナルワでは複数筋あるが、都市を明確に囲う様相を呈していない。全体は不整形で、都市内に壁で囲う方形に近い区画がある。キャンディは15世紀から19世紀にかけて存続したスリランカ最後の王国の都であった。都市を囲う施設は不明確であり、仏歯寺と王宮とは一体化していたと考えられている。

シーギリヤ遺跡は5世紀ころと考えられている宮殿遺跡で、宮殿遺構はあるが都市域は不明である。

5. 今後の課題 一まとめにかえて一

クメールの前近代都市に共通する属性として、その1に、王宮・宮殿域が不明・不鮮明で、被支配者の居住区も不明である、ということがある。

『真臘風土記』は、(三)宮室(住居)の項目の最後に被支配者の住まいについての記述があるが、都市域のどの部分に居住しているかの記述はない。これまでのアンコール地域での発掘調査で、被支配者層の居住跡が確認されている報告は今のところない。

属性のその2は濠を巡らす、ことである。濠の存在から、不整形の都市とほぼ方形の都市の形状があったと考えられる。また、囲う施設がある場合でも四周すべてに無く、とくに東側に濠・土塁がないものがあり、属性として指摘しておく。

個々の遺跡の様相が明らかになってきたとは言え、まだまだ比較して考察するには不十分である。各国の都市遺跡での発掘調査が必要である。今後の成果によって、前近代都市の様相が明らかになれば、東南アジア史の解明にも貢献するだろう。

周辺諸国の同時代の都市との比較研究も今後の大き

な課題である。

クメールの前近代都市として記述してきた事例では、環濠や土塁内に寺院があるが王宮が確認出来ていない。これらの事例は、いわば聖域で宗教空間ではないのか、という疑問がわく。ベトナムの政治拠点チャキュウと聖域空間ミソンのように、世俗都市空間と聖域空間を分けて設置する場合があります、もし、クメールの都市もそうだとすると、現在都市としている遺構群は聖域空間であって、世俗都市は別に存在していたことになる。しかし、今のところ、そうした政治拠点と聖域空間をセットにしたような都市遺跡は発見されていない。クメールの前近代都市は、寺院が林立して、環濠・土塁内のどこかに王宮を配置するのだろうか。王宮の存在は管見するかぎり不明であり、研究課題である。

クメールの前近代都市では、都市に王宮・宮殿が希薄であることは、政治支配のあり方・権力の考え方を反映しているのかもしれない。すなわち、支配の拠点を誇示する必要がなかった、と指摘できるのではないかとすれば『古代学3号』掲載の拙稿「日本の古代都市における儀式空間についての予察的考察」で、古代都市に宮殿域・都市域があると書いたが、王宮・宮殿域がない、あるいは王宮・宮殿域の位置が希薄な都市があっても良いことになる。歴代王については碑文に整理によってほぼ確定している、その王達がどこに王宮を造営したかは、ほとんど分かっていない。

漢籍史料によれば真臘は、中国に少なくとも14回の朝貢を行っている。にもかかわらず、クメールの都市には、中国の影響は認められない。むしろ、インドで展開した都市の理念を下敷にして都市を造営している、と考えざるを得ない。都市のあり方・形態に、中国からの情報を得ていながら、その所見を排除したことになる。中国から得た多くの事柄を排除したことは、クメールの前近代都市を考える上で一つの課題であると、私は考えている。

しかし、シュレシュタプラやアンコール・トムのような方形の都市がクメールの前近代都市にあり、このような方形の都市はインド・スリランカには無く、中国にある、という問題もある。

多くの問題を残したまま、本稿を閉じることにする。クメールの前近代都市についての研究の現段階で気づく

点を列記するに留まった。

年)。

謝辞

大阪大学名誉教授、肥塚 隆さん代表の科学研究費補助金(基盤研究 A)「南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎研究」によって、東南アジア、インド、スリランカの都市遺構を観察する機会を得た。記して感謝する。

注

- (1) 『東南アジアの都市と都城』「東南アジア考古学会研究報告 第3、4、5号」(2005・7年)。
- (2) 『季刊 文化遺産 5号』(1998年)。
- (3) 布野修司編『アジア都市建築史』(昭和堂、2003年)。
- (4) 下田太一『クメール古代都市イーシャナプラの研究』(早稲田大学、2010年)。
- (5) 佐藤 桂『クメール古代都市「チョック・ガルギヤー」研究序説』(早稲田大学、2010年)。
- (6) 溝口明則、中川 武監修『Koh Ker and Beng Melea』(名城大学、早稲田大学、2011年)。
- (7) 『アジアの都市ーインド・中国・日本ー』(国立歴史民俗博物館、2011年)。
- (8) 注4に同じ。
- (9) 注4に同じ。
- (10) 注5に同じ。
- (11) 千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』(鹿島出版会、1982年)。
- (12) 周達観著『真臘風土記』(平凡社、1989年)。
- (13) バンテアイ・クデイの発掘調査については『カンボジ文化復興』(上智大学、1992・2012年)。
- (14) Janice Sargardt『The Ancient Pyu of Burma』(Pacsea Cambridge/Iseas Singapore, 1990)。
- (15) 坂井 隆「スンダ海峽地域の城郭都市遺跡 バンテン・ギラン遺跡発掘調査参加記」『東南アジア考古学会会報 第12号』(東南アジア考古学会、1992年)。
- (16) 応地利明『都城の系譜』(京都大学学術出版会、2011年)。
- (17) 『インド共和国マハート(舍衛城)遺跡の研究・王宮地区の調査』(関西大学文学部考古学研究室、2005

参考文献

- 神谷武夫『インド建築案内』(TOTO 出版、1996)
- 新田栄治「ブッタとシヴァの都市・東南アジア型都市の誕生」『講座 文明と環境第4巻』(朝倉書店、1996)
- 川西宏幸「都市の類型と変容」『講座 文明と環境第4巻』(朝倉書店、1996)
- 『南アジア仏教遺跡保存整備に関する基礎的調査研究』(奈良国立文化財研究所、2000)
- 中村慎一編『東アジアの囲壁・環濠集落』(金沢大学文学部考古学研究室、2001)
- 『東南アジア史 1、2』(岩波書店、2001)
- 大野 徹『謎の仏教王国バガン』(日本放送出版協会、2002)
- 妹尾達彦「中国の都城とアジア世界」『記念的建造物の成立』(東京大学出版会、2006)
- 北川香子『カンボジア史再考』(連合出版、2006)
- Michael Vickery『Society, Economics, and Politics in Pre-Angkor Cambodia』(The Center for East Asian Cultural Studies for Unesco, The Toyo Bunko, 1998)
- Michael D. Coe『Angkor and The Khmer Civilization』(Thames & Hudson, 2003)
- Claude Jacques, Philippe Lafond『The Khmer Empire』(River books, 2007)